

## 批評・紹介

## 詩經諸篇の成立に關する研究

松 本 雅 明

昭和三十三年一月 東京東洋文庫

序五頁 本文九五二頁 索

引二四頁 英文要項二〇頁

多年にわたる著者の詩經研究は、ここに鬱然たるこの書を成した。これまで諸雜誌に發表された數多くの論文は、この書を結晶するための過程であつたのであり、それらの諸論文は、修正を加えられつつ、この書物の一部分となり、ここにはじめて發表されたより多くの部分とともに、著者のめざす結論をみちびきだしている。

著者の研究の目的とするところは、詩經におさめられた三百五篇の詩の年代を考定して、古代史の資料として役立てるにある。また研究の動機は、詩經の詩が古代資料のなかに占める特殊な位置、ことにその「國風」篇の大部分が、庶民の生活からじかに生れたものであることへの重視にある。また研究の方法としては、毛序、毛傳、鄭箋はじめ、舊來の傳説は、戰國以來の諸學派の理念によつて、倫理的・政治的な諸要素が附加されているとして、一切それらにこだわらない。また今の詩經が國風篇を十五の地域に分類するのについても、春秋末から戰國へかけての學者の手が加わつてゐるゆえに、分類の時期と確實度に疑問があるとして、こだわらない。それらの點はフランスのグラネーと態度を同じくするが、グラネーがまず詩

の外部に、古代の祭禮についての推測を設定し、それによつて詩の各篇を説こうとする態度に對しては、第七章「古代祭禮の復原」で詳論するように、批判的である。また詩中にあらわれた天象紀事、人名、地名、國名などによつて、いくつかの詩の年代を比定しようとする橋本増吉博士その他の方法に對しても、第六章「年代推定の資料」で詳論するように、絶對的な決定はむづかしいとして、批判的、否定的である。ただ小雅「十月之交」の詩に現れる日食が、平王三十六年、前七三五のそれであることが決定されるにすぎないのであり、それもあとからの追記であることを保しがたいとする。

かく從來の諸種の方法を否定する著者は、著者独自の新しい方法を提示し實踐する。すなわち、いくつかの詩に同じ表現の句が共通して見えるものを抽出し、その使用が自然なものとして働いてゐると感ぜられるもの、それらは古く、逆にぎこちない不自然な要素をふくむと感ぜられるものは、新しい、とすることである。かくして、「新古の層」を相對的に辨別することが、著者の方法の基礎であり、中心である。

ことに著者が重視するのは、詩經に特殊な修辭法「興」である。すなわち詩の毎章のはじめに現れる自然描寫であり、あとの主文をみちびきだす部分である。開卷第一の關雎の詩についていえば、

關關たる雎鳩は

河の洲に在り

という二行であつて、この二行の自然描寫は、

窈窕たる淑女は

君子の好逮

という主文の二行をみちびきだす。著者によれば、それらはまず、

自然、すなわちこの詩でいへば黄河の中洲にいる鳥を、描寫し、それとは必ずしも關係しない主文あるいは主想、すなわちこの詩でいへば、窈窕たる淑女は、君子の好逑を、みちびくものであり、いいかえれば、即興、リズム、聯想などによつて、主文をひきおこすところの、氣分象徴の言葉である。少くともそれが「興」の修辭の本來の性質である。舊説がそれらの「興」と主文との關係を、より密接な、道德的、政治的な比喩と見るのは、あやまつてゐる。

ところでこうした「興」の修辭も、往往、二つ以上の詩に、共通したおなじ言葉として現れる。それらこそ、著者が詩の「新古の層」を辨別する資料として、もつとも重視するものであつて、たとえば「揚之水」、たばしる川水、云云、という「興」は、國風の中に三度あらわれる。第一は、唐風の「揚之水」篇であつて、全三章のうち、第一章のみを示せば

揚れる水に

白石は鑿鑿

素き衣 朱き襖

子に沃に従はん

既に君子を見れば

云何ぞ樂しまざらん

これは著者によれば、男女の誘引の詩であり、舊説がいうように政治に關連した諷刺詩ではない。そうして、揚之水、白石鑿鑿、「白い石をかみながら奔騰する水」は、愛する人に沃（地名）に従ひゆかんとするところの、白いきものに赤いえりをきた女の、はずんだ氣持をひきだすものであるが、ここの「揚之水」という言葉は、自然であり、この「興」の原形に最も近いものと感ぜられる。つまり

「揚之水」という表現をこのような形で使つてゐるこの詩は、あとの二つよりも古いものである。

次には、王風篇の「揚之水」と題する詩である。やはり全三章の第一章のみをあげれば、

揚れる水は

束薪を流さず

彼の其の子は

我と申を成らず

懷う哉 懷う哉

曷の日か予は還歸せん哉

著者は、この詩を、舊説とおなじく、申という邊境にある兵士が故郷の妻や愛人を思う詩とし、またはじめの二句は、ほぼ朱子の「詩集傳」にいうように、見るところによつて「興」をおこすもの、つまり「屬目の興」とする。そうして水の流れが薪の束にかかつてせかれること、それが家郷を戀い思う征人たちのむすばれた氣持をひきおこすところのであるが、さきの唐風のおなじ句「揚之水」が、愛のよろこびを歌うのとは反對に、愛の悲しみをひきおこす點から見て、前の唐風ほどは古くない。つまりますますいしよさぎの唐風のような形でおこつた「揚之水」という表現が、曲折を経てここに取り入れられたのであり、したがつてこれは、唐風よりおそい歌であるとする。

また第三は、鄘風の卷に、やはり「揚之水」と題して見える歌であり、全二章の第一章をあげれば、

揚れる水は

束楚を流さず

終に兄弟すくなく鮮あざやかにく  
維たもつれ予と女と  
人の言を信ずる無かれ  
人は實に女を迂まよく

この詩のはじめの二句は、さきの王風とほとんど全くおなじであり、全體が愛の悲しみの歌であることもおなじである。しかし著者によれば、この詩の首二句は、さきの王風のそれのように、自然でない。王風が、在地に於ける屬目にちかいかい感じをうるのに對し、これには屬目の感じが全然存在しない。また王風のように、あとの正文と密接な關係を示さない。したがつてこれはすでに王風の詩のごとき形で發生していた「揚之水、不流束×」という興を、便宜的に借用したのであつて、三者のうち最も新しいということになる。

以上のような手續を、いくつかの資料についてくりかえした結果、「興」の言葉のうち、衝動的、直觀的であり、また印象のあざやかなものは、早い詩であるが、自然を描寫しても、即興的な具象性をはなれ、觀念的であり、規格化したものは、のちのものであるという、中間の結論が提示される。その規格化されたのは、時に諺的な性格をさえおび、そのおかれる位置も、章のはじめにはおかれずして、章の中ほどに挿入されたりする。

以上が著者の方法の中心となるものであり、またそれにもとづく中心的な理論であるが、それと並行して、戀愛誘引の詩は古く、亡國悲傷の詩は新しく、また短篇の詩は古く、長篇の詩は新しいという理論が提示される。それらをにらみあわせて結果として、著者の與える結論は、次の如くである。

すなわち詩經のうち最も古いのは、國風のうち、「興」をその原

初の形で使うものである。それらは原初的な祭禮の舞踏歌であり、おそらくは西周後期のものである。その歌い方は、男と女のかけあいであつたとするのは、グラネーの説にもとづくけれども、かけあいのし方は、導入部の「興」の部分と正文の部分とが、性をこにする歌手のかけあいによつて歌われたとし、同時にまたそれによつて「興」の本来の性質が示唆されるとするのは、著者の新しい、そして大へんすぐれた見解であると思われる。また舞踏歌の内容は、戀愛の誘引の歌が多いが、それらは必ずしもグラネーのいうように、祭りの當日の戀愛の行爲なり心理を歌うのでなく、祭りの日以外の、つまり平常の日の戀愛の行爲と心理をも、祭りの日に歌うのであるとする。

次の段階は、國風のあるもの、小雅のあるものが示すような、祭禮をはなれた歌であり、そのあるものは饗宴の歌、祝頌の歌である。それらは手おどり歌もしくは唱う歌であるが、國風のそれは、村落生活の變動に應じて、描寫も抒情的象徴的となる。

次には吟遊詩人の「語り歌」であつて、衛風の「氓」、邶風の「谷風」など、比較的長篇の詩が、一人の女の生涯のなげきを歌うのは、吟遊詩人が、村村をめぐる歩きつつ、樂器にあわせ、或いは身ぶりをまじえつつ、歌つたものとする。小雅のあるものもそれであるかも知れない。

さいごに最もおそいのは、小雅と大雅の大部分をなす長篇の詩であつて、それらは宮廷における職業詩人が、西周の封建制度の没落のち、かつての時代を回想するものとして、西周後期から春秋前期にかけて作つたものとする。頗もまた西周のものでない。

要するに從來の傳説は、雅と頌は西周の歌、國風はおおむね東周

の歌とするのであるが、著者の結論は、それとは逆に、國風が古く、雅頌は新しいとする。またそのもつとも新しいものは、春秋中期すなわち前六世紀初めに及ぶとする。そうしてかく西周の歌と東周の歌との間にある質的な差違は、西周から東周への移行の際に、大きな社會的變動のあつたことを示すとするのであり、西周の東方への遷都は單に犬戎の侵寇のためではないとする。

以上が、著者の新しい方法による結論である。千頁になんなんとするこの大著は、博引旁搜、たとえば詩經の時代の祭禮、また祭禮の際の歌の歌われ方には、奄美大島の八月踊りについての詳しい記述が、重要な旁證として述べられるなど、利用し得るかぎりの知見が利用されている。また著者の文章は、明晰を志すよりも委曲を志すように思われ、簡単な要約を作ることは容易でない。以上は私の理解し得たところに従つて、要約したのであつて、著者の意をつくさないこと多きをおそれる。

ところで著者がその方法の基礎、あるいは出發點とし、中心とするところの、同種の措辭の互見から、相對的な新古の層を辨別しようとする態度は、方法として新しいばかりでなく、はなはだすぐれたものであると考えられる。それは著者が開卷の序説の、そのまたはじめにいうように「詩を詩自身に即して」、つまり詩經という文獻の性質を、それ自身に内在する要素から考えようとする、最も著實な態度であるからである。この態度の上に、書物全體は、自信にみちみちて書かれてゐる。としか考えられない、というよりほかはない、でなければならぬ。そうした表現の頻出が、この書物の文體の一特長となつてゐるのは、その自信の現れである。

それと共に、かく自信にみちみちてゐることが、この書物につい

ての危険をもちらむと思われる。

第一は、同種の措辭を手がかりとして新古を辨別しようとする著者の方法は、はなはだすぐれるけれども、その方法の適用にあつては、強引に感ぜられることが、しばしばなことである。少くとも細心な吟味を欠くと思われる點が、少くない。たとえば、前に例示した「揚之水」についての論證である。まず「揚之水」という三字を、著者が「奔騰する水」とするのは、毛傳の「揚は激揚也」、鄭箋の「激揚之水」、つまり急流という訓詁に、無吟味に従うものであり、朱子が全く反對の意味の、「揚は悠揚也、水の緩かに流るる貌」とするのは、無視されている。そうして太平御覽や漢石經の魯詩では「揚之水」に作るというむしろ不急の異同が、丁寧な吟味さされてゐる。朱子の悠揚の訓は、けつきよくにおいて劣るであろうが、かりにもしそれに従うとすれば、三つの「揚之水」の「興」の新鮮さの層次についても、別の結果が得られるかも知れない。また「不流束薪」の句を、著者は「水の流れが薪の束にかかつてせかれる」とするが、これはこの句の傳統的なよみ方、「束楚を流さず」とはちがつた新しい一つの読み方を提出するものである。そのためにはこの「流」の字の用い方についての、他の使用例をも顧慮した説明がなければ、讀者は納得しないであらう。また唐風「素衣朱襖」を著者が「女の服と見るしかない」とするのは、著者の創見であり、傾聴にあたゐるが、この句についての舊來の傳説が、信用をおきにくいと共に、著者の新説もまた、積極的な證據は充足されていない。また鄭風の「終鮮兄弟」の兄弟を、著者は朱子の「兄弟は婚姻の稱、禮にいわる嗣いで兄弟と爲るを得ざる、是也」にもとづいて説をなすが、朱子が「婚姻」という意味は、禮記の曾子問を旁證

とすることが示すように、おそらくは説文の「婚は婦家也、姻は婿家也」、つまり縁家の意に用いているのであつて、著者の朱子解釋には、混亂があるように思われる。少くとも「本來の兄弟と、二次的な意味が重なりあつている」という見解は、朱子の注自體にはない。いずれも著者のこの條の結論には深く影響しない手續上の疏漏なり過誤であるが、なぜ詩そのものから出發しようとする著者は、詩の言語そのものについて、今すこしく細心な吟味を加えないのであろうか。そうしたことをいぶからせる。

またこのいぶかりは、ひいては人ををして、三つの「揚之水」について著者が與えた順序は、同一の修辭に對する檢討の結果であると共に、著者のもつ別の理論、すなわち戀愛誘引の歌は必ず古く、悲傷の歌は新しいとする理論が、先入見として働いているのでないかという、失禮な想像さえいだかせないでない。

もしまた著者には、時にその先入見によつて、博引旁搜のすべての資料を、自己の理論の方向にむかつてのみ利用するという傾向が、はたらかないでもないというおそれをもつとするならば、著者の最も大きな結論とするもの、すなわち雅頌が新しく、國風が古いとする議論にもまた、白川靜氏の書評（立命館文學一九五八年九月）がすでにいうように、なお吟味の餘地は、あると思われる。すなわち著者の態度は、國風的なものと雅頌的なものとを同時存在をみとめず、國風的なものから雅頌的なものへと、段階的な發展の方向のみを考慮するのであるが、風、すなわちいなかの歌と、雅、すなわち都のうたとが、同時に發生し得る段階で、周の詩歌はすでにあつたとすることは、全く困難であらうか。著者は古代の祭禮については、二重の層の存在を主張し、その源をただ一つとするグラナーの意見

をしりぞけている。また曆法についても、周正を支配曆、夏正を素朴な實用曆として、重層的な二つの存在とする。詩の發生についても、同じような方向を、少くとも吟味として考えて見ることは、必要であらうか。

更にまた大きな吟味の不足として感ぜられるのは、今の詩經の編次のし方を、著者は春秋以後の恣意的な所産として一蹴するが、そうした恣意がいつ何ゆえにいかにして生まれか、それについての充分の説明はない。この説明をともなつてこそ、著者のいう恣意性はあきらかになるのであるまいか。

著者の方法は、くりかえしてのべるように、甚だ新しく、すぐれたものである。著者がこの方法の下に、より細心な研究の進められることこそ望ましい。従來の傳説が多くの無理な歪曲を含むことは、著者の指摘する通りであるが、著者の是正もまたなお再考三考を要するものがあると感ぜられる。

自信にみちたこの書物には、本筋とはなれた個所にも、時に勇斷の言葉がある。婚姻に定まつた年齢があつたとする舊説を駁したついでに、早婚の慣習は六朝唐はもちろん、それ以後に於いても變るところはなかつたとされるけれども、白居易の詩「友に贈る」の第五首は、少くとも唐代のある時期は、この概括にふくまれにくいことを示している。また現實の王朝ないしは爲政者に對する批判の困難さを、史記の著者司馬遷が罪を得たこと、正史は常に次の王朝によつて作られることを證據として強調し、小雅の詩の歌う事實が、あとからの追詠であることを説明しようとするが、白居易の「新樂府」その他唐人の詩のあるものは、宋の洪邁の「容齋隨筆」にいうように、この概括が性急にすぎることと思わす。また儀禮の郷飲酒

禮が、荀子の梁論によつて生まれたとする見解は、もし文獻に内在于する性質を重視するという立場に立つならば、郷飲禮禮の文體が、荀子のそれより新しいという論證がなされねば、成り立たないであろうが、事實はむしろその逆であることを思わせる。

なおまた著者は、毛鄭以來の舊説を破するに急なるあまり、それらの舊説の理解について不十分な點があること、前にもふれた通りであるのは、やはりこの書物の欠點と思われる。あえて微細な例の一つをあげれば、「興」の概念に對する歴代の解釋をあげたうち、漢の鄭玄について鄭小同の「鄭志」をあげるが、これも實は鄭玄の説であること、いうまでもない。

また舊説を破するに急なるあまり、舊説をなすだけ自己の解釋に遠ざけて見る傾きも、ないではない。たとえば「興」の修辭が氣分象徴であることを、確定したのは、著者の功績の一つである。しかし著者の方向の解釋が、舊説の中に全くなかつたかどうかは、疑問であつて、「詩解における二千數百年の蒙を拂つた」という著者の自負は、やはりすこし性急であるかも知れない。著者が著者の見解と異なるものとして列擧された從來の學者の見解の中にも、著者の見解に近く私には讀み取られるものがあるのであつて、もし著者が引かれなかつたものをあげるならば、朱子が論語の子罕篇の「唐棣の華、偏として其れ反せり」云云につき、「六義に於いて興に屬す、上の兩句は意義無し、但だ下の兩句の辭を起すのみ」といつているのを、附記し得る。

(吉川幸次郎)

### 湖南時務學堂初集 (圖版第一)

光緒二十四年(一八九八)長沙で出版。内容は學約、界説、答問の三部からなる。學約は時務學堂の學約、界説は讀孟子界説・讀春秋界説を指し、何れも梁啓超の執筆にかかる。答問は時務學堂の學生の質問とそれに對する總教習梁啓超、分教習韓文舉、葉覺邁の應答である。學約、界説は飲冰室文集にも取められ、答問は翼教叢編、覺迷要録に抄録されている。しかしそれは抄録であつて、この書によつて始めて知られるものが甚だ多い。ことに學生の誰がどのような質問をしたかは、この書だけでしか判らない。珍重すべき一文獻である。

### 譯書彙編第一期 (圖版第二)

明治三十三年(一九〇〇)十二月六日東京で發行。譯書彙編は江蘇出身の留日學生が中心となつて發行した雜誌であつて「留學界雜誌の元祖」といわれるものである。この雜誌は廣く政治一般を對象として、歐米並に日本の著述の翻譯と紹介を目的としている。日清戦争後には、洋務的ないわゆる西學よりも、變法的ないわゆる西政に對する關心が高まつてくるが、この雜誌によつて一應の實を結んだということも出来る。啓蒙的な雜誌であるけれども、そこに譚駁されたルソーの民約論・モンテスキューの法の精神は、變革思想を鼓吹する上に重要な役割を果している。これはその創刊號の表紙と目次である。